

---

# ゆるゆり SS集

ハーミエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆるゆり SS集

### 【Nコード】

N2399X

### 【作者名】

ハーミエル

### 【あらすじ】

いろいろな話を追加していきます

百合な話から、普通の話まで

ひまさくを書くと、基本的には甘ったるくなります。たぶん

## 初詣と私たち（前書き）

初詣のお話

それぞれ別々に、三が日を送っていたようなので絡ませってみました

## 初詣と私たち

年が明け、三が日も終わった4日

京子発案の元、ごらく部と生徒会メンバーは初詣に行くことになった  
京子たちごらく部と、生徒会組と別々に集合して現地で会うことにな  
った

ごらく部、集合場所集合時間頃

あかりが集合場所に着くと、結衣が来ていた

「おっ、あかり早いな」

「あつ、結衣ちゃん。明けましておめでとー」

「うん、あかり明けましておめでとー」

そんな挨拶をしていると、あかりが来た道から身に覚えのある人が  
走ってきた

「結衣せんぱーい！ 明けましておめでとーございます！」

着くなり早々結衣の元に駆け寄り、目を輝かせながら挨拶をした

「ちなつちゃん、明けましておめでとー」

「ああ、新年早々結衣先輩と一緒に……」

ちなつが、目を閉じて浸っていると、

「私もいるぞ！ 結衣、ちなちゅー、あけおめー」

「うわっ！ 京子、いつの間に。明けましておめでとー」

「……ちっ」

ちなつは、裏を向いて舌打ちをした

「え？ ちなつちゃんなんか言った？」

「いいえ、なんでもないですよ。京子先輩明けましておめでとー」  
ざいます」

「ねえ、ちなつちゃん京子ちゃん！ あかりもいるよ！ スルし  
ないでー！」

そついつもの懇願をした後、ふと気がつく  
自分だけ振袖であることを

「ていうかなんでみんな私服なのー！」

「えー、だってここ（SSS）でそんなことしてもねえ」

「ええ！　ここってどういことなのー！」

「あかり、深く考えても無駄だよ」

「京子先輩が変なこと言うのは、いつものことでしょ？　あかりちゃん」

「照れるな」

「褒めとらん」

京子が照れると、結衣がすかさずツツコミを入れる

「ていうか、早くしないと生徒会の人たちに怒られちゃいます」

「あつ、ほんとだ。もうこんな時間、京子ちゃん結衣ちゃん行こう」

「ぶー」

「文句言つてないで。早く行くよ、京子」  
と3人にせかされながら移動をする

一方、生徒会の集合場所集合時間5分前

綾乃と千歳が集合場所にやってくると、既にそこには二人いた

「あつ、会長に西垣先生まで。明けましておめでとうございます」

「会長、西垣先生、明けましておめでとうございますー」

「おう、あけましておめでとう」

「…」

「集合時間より、少し早めに来るとはさすがねだそうだ」

不思議そうな顔をしながら、西垣先生を綾乃は見ながら

「いつも思ってますが、西垣先生は会長の考えてること分かります  
ね」

「なあに、私と松本は付き合いが長いだけだ。お前たちにも分かる  
ようになるさ」

「（そうなる気がまったくしないのは何故）」

「あれ？ そういえば大室さんと古谷さんはどないしたんやる？」

「集合時間まで時間あるし、大室さんが何かしたんじゃないかしら」  
「それありそうやわ」

すると、何やら騒がしく走ってくる二人が向かってきた

「向日葵のバーカ！ 集合時間5分前に行こうって言うておいたのに、もうギリギリじゃないかー！」

「櫻子があんな寄り道するのがいけないんですわ！」

「やっぱり、いつも通りやったな」

「先輩方、遅れてすみません！」

「櫻子ったら、途中に寄ったコンビニであろうことか、週刊誌を立ち読みしたんですわ」

「うるさい！ 向日葵がコンビニに寄ろうって言うて買い物が高かったのが悪かったんだろ！ おっぱい魔人！」

「誰がおっぱい魔人ですって！」

「まあまあ、二人とも落ち着いてー。ほなみんな揃ったことやし、神社行こー」

「そうね、歳納京子なんかより先に神社についてやるんだから！」  
と綾乃たちも動き出した

「神社、入り口前」

「ごらく部と生徒会組が同時に到着した」

「おっ、綾乃ー。同時に着くとは、丁度いいね」

「そっそうね」

少し動揺し顔を赤らめつつ、綾乃は答える

「みんなそろつとるし、お参りしよー」

「最初どうするんだっけ？ 綾乃は知ってる？」

「しっ知らないわよ」

「最初はその水出てる所で手を洗って、口をゆすいで体を清め

るんよー」

綾乃が困っていると、すかさず千歳がフォローする

「千歳って物知りだな」

結衣が、関心しながら千歳を見る

「そんなことあらへんよー。おばあちゃんが昔、教えてくれたん覚えとっただけやてー」

「あたし、いつちばーん！」

と言いながら、櫻子が走って行く

「おっ、負けないぞー！」

京子も、それに続いて走って行く

「まったく、櫻子はこういう場でも落ち着けませんの？」

「まったく京子は……」

結衣と向日葵が呆れてみると、走っていく櫻子が……コケた皆、顔面蒼白でその光景を見ている

時間がスローモーションに過ぎていく中、京子は一人

「（おっ、櫻って名前に入るだけに桜模様のパンツ）」

バツシャーン！！！！

「へつくしゅっ！」

「頭だけ水に浸かったただけで済んだんですもの。歳納先輩に、足を掴んでもらわなかつたら、上半身ずぶ濡れでしたのよ」

「櫻子ちゃん、大丈夫？ ほら、タオルだよ」

「あかり、なんで持ってるの？」

「深く考えちゃだめだよ」

京子が不思議そうに言うと、結衣がそうつぶやいた

「気を取り直して、お参りをしよー！」

京子の先導で、全員で賽銭箱の前まで移動する

「えっと、二礼二拍手一礼でよかったのよね？ 千歳」

「それでええんよー」

「じゃあ、みんな一斉にしょー！」  
パンパンッ

「（目立つ子になりますように）」

「（結衣先輩ともっと仲良く）」

「（一人暮らしにもっとなれますように）」

「（ちなちゆと仲良くなれますように）」

「（歳納京子と仲良く…）」

「（豊作祈願！）」

「（櫻子なんかにはけませんように）」

「（向日葵なんかには負けないんだから）」

「（…）」

「（たくさん爆発できますよ…違った、実験がうまくいきますように）」

今まで、手を合わせ拜んでいた面々が一斉に顔を上げる

「よーし！ みんなで遊びに行こう！」

「ええなあー、どこ行く？」

「あっあの私、結衣先輩の家行きたいです」

「えっ、さすがにこの人数はちょっと」

「ええー、いいじゃん別にー」

最初困惑したものの、京子の一言で諦めた

「仕方ないなあ」

「結衣ちゃん、お昼どうしよう？」

「皆で何か作ったらええと思うわー」

「では、私も何か手伝いますわ」

「ええなあー、何にしょー？」

「松坂牛！」

「イタリア料理フルコース！」

京子と櫻子が一斉に叫ぶ

「櫻子、うるさいー！」

「無理だ」

と結衣と向日葵が、それを一蹴する

「ほら、行くぞ綾乃」

「わっ分かったから、そんな引張らないで……！」

「（早速ご利益あったわー）」

そんな会話をしながら、結衣の家に歩いていく

一方、あかりは

「（何か良い特徴がつくと嬉しいなって……あれ？）」

「って、待ってみんなー！ あかりを置いて行かないでー！」

「あっ」

## 初詣と私たち（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます

次回更新は未定です

待っててもらえるとありがたいです

## プールに行こう！（前書き）

あかりが電車に乗り遅れた当日、その後の話  
無事、あかりはみんなと合流出来たのであった

プールに行こう！

休憩エリア

「池田先輩大丈夫でしたか？」

着いて、千歳を見るなりそう訊ねた

さすがに、あの写メを見て気がかりだったのだろう

「もう大丈夫やー。心配してくれてありがとなー赤座さん」

更に今現在、長椅子に横になっている状況である

ちなみに、結衣は膝枕している

「本当にその鼻どうにかした方がいいわよ。千歳」

「うん、私もそう思うやけどなー」

げっそりとした顔で、綾乃がやってくる

「他のみんなはどうしたの？ 結衣ちゃん」

「京子がじつとしてみると思ってるの？」

結衣は、呆れがちに答える

「歳納京子は、大室さんと一緒にはしゃいでるわ。今は、古谷さん

と吉川さんが相手してくれてるの」

「綾乃ちゃんも、一緒におったよな。どないしたん？」

「少し疲れたから、休みに来たのよ。歳納京子も、大室さんもなん

であんな元気なのー…」

「その調子だと、ちなつちゃんと古谷さんもそのうち戻ってきてそ

だね」

「赤座さんも。うちは大丈夫やから、遊んできてええんやよー」

「じゃあ、行ってきますね」

「あかり、気をつけてね」

千歳に勧められるまま、4人のもとに行ったあかりは後悔すること

になった

「あつ、ちなつちゃん！ ひまわ…り…ちゃん？」

あかりが教えられたところに行くと、二人ともぐったりしていた

「あ…あかりちゃん…遅いよお…」

「それどころでは…ありませんわ…赤座さん…逃げて…」

そう言い終わると、二人とも真っ白になってしまった

「ええ！ 遅いつて！？ 逃げるつて！？ 何があつたの！？」  
すると

「おつ、あかりじゃん。やっと来たか」

「あかりちゃん！」

背後から京子と櫻子がやってきた

「あつ京子ちゃんに櫻子ちゃん。遅れてごめんね」

と言っている間に、何故か二人に両脇からがつちり捕まえられる

「え？ どうどうしたの…？ 京子ちゃん…櫻子ちゃん…？」

「ちなつちゃんと向日葵が疲れたつていうからさ」

「あかり、行こうぜ」

二人に連行されつつ、何故あの二人がああ惨状になってしまったのか分かつたあかりであつた

お昼

「いろいろ気になるんだけどさ、京子」

「どうした、結衣？」

「どうしてこうなつた」

「…さあ？」

結衣の目線の先には、ぐったりとしたあかりとちなつ、向日葵の姿があつた

「あかり、頑張つたよ…」

「結衣せん…ぱい…」

「もう…こりこり…ですわ…」

3人共、目が虚ろになっている。とても文章では表現できないくらい大変なことがあつたのです

「ほら、3人共水分とらなあかんよー」

すつかり回復した千歳が、3人に飲み物を持ってくる

「あれ？ 大室さんは？」

「大室さんなら、お昼食べれる場所探しに行ってくれてるよ。あっ京子、荷物持つの手伝って」

「えー、荷物持ちー？」

「この中で、お前が一番元気だろ？ さあ、文句言わないで」

「ぶー」

と渋々京子が荷物を持つ

「じゃあ、お弁当全部私の物な！」

「…ねーよ」

結衣が、すかさず突っ込む

「向こうに場所取りしてきましたー！」

と、そうこうしているうちに、櫻子が戻ってきた

軽くて大きめの荷物を持って行ったので、それを置いて場所をとってきたのだろ

「ありがとな、大室さん。ほな、みんないこかー」

「あかりー？ ちなつちゃん？ 行くよ」

「ほら、向日葵行くぞ！」

3人もたどたどしいが、どうにか動くことが出来るようだった  
櫻子が案内した先に、ある程度の空きスペースがあった

周りを確認しつつ、支度をする

変なところだと、移動しなくちゃいけなくなるからだ

「私も、少し作ってきましたの」

と向日葵が差し出したお弁当の中には、定番なからあげや卵焼きなどが入っていた

後、何故か磯辺揚げも入っている

「あつ、磯辺揚げ！ いっただきー！」

「あつ、ちよつと待ちさないよ櫻子！ まだ準備がおわってませんわ！」

「もう、櫻子ちゃん手伝ってよー！」

もう食べる気満々な櫻子に、レジャーシートを広げているちなつが

叫ぶ

「ちなつちゃん、片方私がやるよ」

「ゆっ結衣先輩！」

とそこに、櫻子がやってくる

「じゃあ、先輩。私変わります」

「櫻子ちゃんは、向こう行ってて！」

が、ちなつに一蹴されてしまった

「こんなところね」

「はい、お弁当。みんなの口に合えばいいんだけど」

「いったただきまーす」

「結衣先輩のお弁当…おいしい…」

「船見さんは、ほんま料理上手やなー」

「そっそんなことないよ」

千歳に褒められ、結衣がてれる

「結衣ー、それ取ってー」

「はいはい。ほら京子」

「さんきゅー」

京子から少し遠いところにあるものを、取ってあげる

「結衣ちゃん、京子ちゃんの奥さんみたいだね」

結衣が京子におかずを取ってあげる光景を見ていたあかりが、そんな

な爆弾発言をする

「ぶっつっ！」

思わず噴き出してしまう結衣

「えへへー、結衣は私の嫁だからな」

平然と嫁宣言をする京子

「そっそんな…結衣先輩は…そんなはずは…」

かなりうるたえるちなつ

「まだまだ先は分かんよー。綾乃ちゃんにもチャンスは」

「べっ別に何も考えてないわよっ！」

ちよっとシヨックを受けた綾乃に、フォローを入れる千歳

そしていつのまにかいがみ合ってる櫻子と向日葵  
そんな騒がしいお昼も済み、片づけが終わった頃  
「あっちでビニールボート貸出だつて！」  
との一言で、午後はそれで遊ぶことになった

## 2年生組

「意外と大きいな」

「そうね、3人乗っても余裕あるのね」

ボートの上に、3人がまるく座っている

「そういえば、歳納京子。まだ戻ってこないのね」

「どないしたんやるなー？」

京子はトイレ行つてくると言つて行つたつきり、かれこれ20分は  
戻ってきてない

「（なんか、嫌な予感がする）」

と結衣が思つてると

「結衣 綾乃ー千歳ー、こっちこっち」

みんな一斉に声のした方に、体を向ける

重心が偏ってしまった

結衣が、京子の思惑に、気づいた頃にはもう遅かった

「せいやー！」

京子によつて、ひっくり返されるボート

こついうのは、少しでも重心が偏ると、転覆しやすいもの

3人が3人、プールに放り出されてしまう

「ぶはっ！ 京子、何するんだよ！」

「歳納京子！ おっ驚くじゃない…やりすぎよお」

「あはははー、ごめんごめん」

と結衣が京子を見ると、綾乃が丁度京子がいる方にいったらしく、

勢いで京子に抱きつく格好になっていた

これはマズイと思つて、千歳を見たら遅かった

千歳は、鼻血を出しながら宙を舞っていた

「千歳！」

その時の千歳の顔は、とても安らかだったそうだ

### 1年生組

「なんか結衣先輩の叫び声が聞こえたような…？」

「ちなつちゃんどうしたの？」

「ううん、なんでもないよ、あかりちゃん」

その頃、あかりとちなつ、向日葵も2年生組と同じように座っていた

「それにしても櫻子ったら、お手洗いにしては長いすわね」

櫻子は、トイレと叫んだ後に姿を消し、30分は帰ってこない

「うーん、もしかしたら櫻子ちゃん。途中で何か見つけて遊んでるのかも」

「それはありそうですわね」

あかりの発言に、納得をする

「あかりちゃん、こっち」

と櫻子のあかりを呼ぶ声が聞こえる

「どうしたのー？」

あかりは声のした方に、移動する

それは、丁度ちなつと向日葵が座っている間であり

「ていやー！」

おもいつきり、櫻子がボートを転覆させた

放り出されるとかではなく、まさしく飛んだ

3人も顔面蒼白であった。今まさにかなり低空だが、確実に宙を舞っている

ドッポーン！

「ぷはっ！ こら、櫻子！ いきなり何するんですの?!」

「櫻子ちゃん、ひどいよ!？」

ちなつと向日葵が、櫻子の居た方向を見ると

「……」

あかりと櫻子が浮かんでいた  
おそらく、あかりが飛んだ先に櫻子が居たために、互いの頭がぶつ  
かったのであるう  
そして二人は無事、監視員のお兄さんたちに助けられた  
言うまでもなく、お説教付きで

あかり達がお昼を食べたところに戻ってくると、そこにはもう京子  
たちが居た

「あつあかり達も戻ってきたんだ。おかえり」

「なんで、あかりと大室さんはなんで頭さすってるんだ？」

それがと向日葵が、今あったことを話す

「それ、こつちだと歳納京子がやったわ。まったく、今度やったら  
罰金バツキンガムよ」

「ぶふっ…罰金…バツキンガム…」

「あつもうこんな時間ですわ。そろそろ帰りませんと」

「あつほんまやー。そろそろ帰って、夕食の買い物せな。今日、お  
ばあちゃんおらんかったしなー」

それぞれ荷物をまとめ始める

「じゃあ、帰ろうか。みんな、忘れ物ない？」

全員ないと答え、プールを後にする

「今日のプール楽しかったー」

「私は疲れたよ…」

「船見さん、何度もありがとうなー」

結衣が疲れたと言うと、千歳が謝る

「あかり、今度はゆっくり遊びたいな」

「賛成…」

「同感ですわ…」

あかりは、午前中を思い出しながら言った

「向日葵、私夕飯ステーキがいい！」

「くたばれ」

「だから、もっとオブラートにつつめよ」  
「そんないつも通りな会話が展開される」

「とっ歳納京子……」

「え？ 何？ 綾乃」

「また……来てあげてもいいわよ……いろいろあつたけど、今日は楽しかったわ」

綾乃は、顔を真っ赤にしながら言う

「……そつか。じゃあ、考えとくな」

#### 電車内

「あっかりー！」

「はっ、あかり寝ちゃってた！ ……あれ？ みんなは？」

ふと電車の外を見ると、そこには京子たちが居た

そして、今止まっている駅は、もちろん降りる駅

無情にも閉まる扉、青ざめるあかり、あっ忘れてたという顔をした京子たち

あかりがふたたび、この駅に戻ってきたのは、更に1時間後のことだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2399x/>

---

ゆるゆり SS集

2011年12月10日01時54分発行